



コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレター No. 149

2018年12月



「思い巡らす」こと

コルネリオ会会員 山田伊智郎

主のみ名を讃美します。すっかりご無沙汰しており申し訳ありません。いつもニュースレターを楽しみに拝見しております。

私がキリスト者になったのは、防大の2年の5月なので、約40年前になります。少し振り返りながら、この間のキリスト者として歩んだ私自身の在り様の変化を書いてみたいと思います。

当初は、キリスト者として正しい生活（道徳的に正しい）をしなければならぬと感じており、いわゆる「清く、正しく、美しく」を目指していました。教会の先輩からもそのような学び、教え育てられたものです。しかし、このことには無理がありました。まず、教会の自分と普段の自分にギャップを感じながら、2面性を持った生活をしていました。つまり、教会ではいわゆる「良い子ぶった偽りの自分」で、実生活では「飾りのない無理のない自分」でした。このように矛盾を抱えながらの生活は苦しく窮屈なものでした。キリスト者になったのは、幸せになるためで、苦しむためではないはずだと、長い間このような苦しみと疑問が続きました。

しかし、40代くらいの時に転機が訪れました。それは、教会学校で成人科の教師を任された時でした。聖書を読んで準備していると、聖書のあちこちに矛盾を感じる点があり、整合性を求めて「思い巡らし」ながらクラスの準備をしていました。そして、自分なりにその矛盾を包含して、整合がとれるような解釈を考え、成人科のメンバーにその解釈を話しました。しかし、年配の教会員から、勝手な解釈はダメだ、聖書は自分勝手に解釈するものではないと、きつく言われました。聖書を「自分の都合のよいように解釈しているのでは

ないか」との忠告だと思えますし、実際にそうかもしれませぬ。しかし、そのように言われながらも、この「思い巡らし」が面白く、成人科でこの「自分勝手な解釈」を続け、なぜこのような解釈がいけないのかを年配の教会員に問い続けました。その年配の教会員も次第に理解を示してくれるようになり、今でも一緒に教会学校の成人科で学んでいます。以前は一方的に聖書を読み、解釈を講義するクラスでしたが、今は、メンバーそれぞれが、生活に根付いた解釈で聖書を読み、その内容を分かち合っています。そのような聖書の読み方から、気付いたことは、「イエスは我々を縛るためではなく、解放するために来た」ということでした。このような数々の気づきが、私に新しく広い思いを与えてくれ、窮屈な生活から少しずつ解き放ってくれました。しかし、「自分の都合のよい解釈をしているのではないか」との思いは残りますが、そのことも含めて主が導いてくれると信じています。

今では、キリスト者であることは、ごく自然で普通のことになり、教会でも自分を飾ることがなくなりました。「人と比較することや人からどう思われるかを基準にして行動することほど、人を縛り、不幸にすることはない」と聖書から教わったからです。

そして、もう一つ気付いた重要なことは聖書に出てくる「言葉」についてです。例えば、「罪」「裁き」「永遠の命」など、一般の人が聞いたら、その解釈に戸惑いを感じてしまう言葉です。「罪」はよく「的外れ」で、「主の方に向いてない状態だ」といいますが、「裁き」は如何でしょうか、「自分の言葉」で人に説明するのはとても難しい言葉です。「永遠の命は」どうでしょうか、「自分の言葉」で説明するのは難しいですし、本当に自分の解

積で正しいのかと疑問も湧きます。しかし、「自分の言葉」が正しいかどうかという問題ではなく、キリスト者としての歩みの中で、これらの言葉に向き合っ「問い」を続けてゆくことが大切だと思います。キリスト者同士が別れ際に「祈ってますよ」という言葉をよく使います。しかし、これは「さようなら、元気でね」という挨拶の言葉として使っているように感じます。こ

れと同じで聖書に出てくる「罪」「裁き」「永遠の命」などその日本語のイメージからは違う意味を表す言葉についても、あまり考えることもなく、定番の「キーワード」として使っているのではとないかと思ひます。習慣的に使うのではなく、その内容を「思い巡らし」ながら、掘り下げることが、豊かな広がりのある生活を導いてくれると思っています。

洗礼名（プリンセル先生の思い出）（その2）

コルネリオ会会員 中村誠一

今回判明したのであるが、プリンセル先生は、当初から私に「洗礼名・ヨシュア」を準備していたのだそうだ妻が直接プリンセル先生から聞いていたという。それを私が「洗礼名はダビデになりそうだ」と思ひ込み、先回りして「ダビデは嫌いだ」と言うようになったというのが「ことの真相」である。「ダビデが嫌いだ」と話すと「なぜ？」とよく聞かれたが、今となっては自分の思ひ込みであり、天下の「ダビデ王」に大変失礼なことをしたことを心底恥ずかしく思っている。ある時、韓国の教会で「兄弟、愛を基調とするキリスト教の信者が、（神様が認めた）ダビデを嫌いだと言ひすぎると、神様の恵みをいただけませんよ」と真顔で忠告されたことがあり、自分の狭量さに顔が赤くなった覚えがある。身の程知らずという言葉があるが、イエス・キリストに次ぐ「聖なる名前」にランクされるであろう「ダビデ」を拒むとは何という男であろうか！しかし、この件は、妻の「要望」や「好み」の問題ではなく、プリンセル先生の「判断と決断」という権威あることなのだ。洗礼を受けてから日が浅い私には、「ダビデ」は重すぎたのだ。私の「霊の母」（先生の手紙の最後には必ず書いてあった。）であるプリンセル先生は、すべてをご存じだったのだ。それ以来「ダビデが云々」は封印した。

プリンセル先生が私によく話された「み言葉」は、マタイの福音書の次の箇所だった。

1「まず神の国と義を求めなさい。そうすればこれらのものは全て、それに加えて与えられます。」 マタイ 6：33
2「しかし先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります。」 マタイ 19：30

プリンセル先生とお会いし、受洗するまでに十数年の期間を要した私だが、待っていてくださったことに

感激している。信者の最後列をイエス様の救いを求めて下を向いて歩いていた当時の私（後の者）が洗礼を受けたのだ（先の者に加えられた）。プリンセル先生は、あなたにもイエス様のためにできることがあるのです信仰を持ち続け、それを求めてゆくのが使命なのです、と伝えてくださったのだ。私は自分の人生において、もっと素直で謙遜な姿勢を持ち、キリスト者としての「生きがい」を求めて生きることを諭されたのだ。手前味噌ではあるが、私はプリンセル先生に愛され続けたのだ。すかさず妻は、出来の悪い何かは特にね、と笑う。私はこの指摘を快く受けとめようと思う。先生にとっての私は、決して良い「息子」ではなかった。

プリンセル先生は「イエス様第一ですよ。」と言うのが口癖であった。電話の最後には必ずこの言葉が使われた10年前、2008年の先生の84才の誕生祝賀会に本土から妻と出席したのだが、忘れられない思ひ出があるプリンセル先生は認知症の症状がかなり進み、セレモニーで私が Do you remember me? と話しかけても、ほほえみながら、わかりませんと答えられた。プリンセル先生が私たちに何かを伝えるとすれば「この言葉」しかないと思ひった。セレモニーが終わり、プリンセル先生が教会の玄関前の道を歩いて牧師館に帰ろうとしていた。私がたまたま玄関前にいたのだが、先生は急に振り向き、私に向かって「どこかでお会いしましたよね。」と日本語で話しかけたのだ。私は思はず英語で、私は先生に50回以上もお会いしましたよ！と涙を流しながら叫んだ。プリンセル先生はあの時、一瞬でも私のことを思ひ出してくれたのだと確信している。

プリンセル先生、私たちは心から感謝しています。ヨシュアとエステル「霊の母」になってくださり、本当

にありがとうございます。健康が守られますようにお祈りしています。お元気でお過ごしください。

2018年7月 糸満市 ヨシュアとエステルより
追記：この「思い出」は、プリンセル宣教師の「来日65周年、94歳の誕生日に合わせて、今年の7月に教会の記念誌に投降したものを短くしたものである。昨今のキリスト教会の教勢に合わせるように、私がお世話になっている教会も「牧師不在」となり、那覇教会の牧師が兼牧となった。月一回の割で、信者である私がメッセージを担当することになり1年半が過ぎた。記述にもあるが、月一回、近くの「施設訪問」にも信者7～8名と

AMCF 東アジアインターアクションに参加して

ハレルヤ！ 主を賛美します。

今回10月10日（水）から13日（土）まで3泊4日の間、韓国ソウルにある海軍中央教会で行われた東アジア軍人クリスチャンリーダー研修会に中野久永兄と2名で参加して参りました。大会のテーマは「強くあれ。雄々しくあれ。」（ヨシュア1：6）で、朝7時から夜9時過ぎまで、びっしりとしたスケジュールでした。主催は現役軍人クリスチャン会（約60,000人）で退役軍人クリスチャン会が支援したそうです。

1. 賛美の力

今回の研修会で最も印象に残ったのは、女性軍人を交えた賛美チームによる賛美の力でした。練習に練習を重ねており、集会の始まる前に必ず賛美で始まり、会場が聖霊で満たされました。また中堅軍人幹部による賛美もあり、制服姿で賛美する様子は、日本ではとても考えられませんでした。また以前馬堀聖書教会に集っていた韓国防大留学生の柳兄の奥様が賛美していたので、びっくりしました。

2. 今回の特色

今回の研修会の特色は、台湾（7）、モンゴル（4）、日本（2）、韓国のほかに、中央アジアの5か国（キルギスタン（6）、カザフスタン（4）、タジキスタン（2）、ウズベキスタン（2）、タルクメニスタン（2））が参加したことでした。

タルクメニスタン2名は戦闘服姿で参加していました。参加者は計約70名でした。

牧師1名で参加している。約20名ほどの成人が出席してくれるが、パソコンとプロジェクターを駆使してユーチューブからキリスト教の「アニメ紙芝居動画」や各種行事の案内、讃美歌などを紹介している。記述した時期は、「沖縄返還」直後で、自衛隊に「風当たりが強かった」時代である。本島南部の教会にも10名程度の自衛官がいたのだが、数年後に本土勤務に戻る等の事情で、教会にとどまっている自衛官は少数と言われている。

コルネリオ会会長 石川信隆

3. インターアクションとは

軍人クリスチャンのリーダーを育成する目的で、誘導的聖書の学び、会話祈禱、証しの方法、伝道の方法を通じて「キリストにあって一つ（ガラテヤ3:28）」をお互いに実感するために行なう、少人数の「リーダー研修会」のことです。昨年はモンゴルで行われました。一方、3年に1回交代り（Fellowship）を目的とした大会（Conference）が行われます。来年日本が大会を行うことになり、現在その準備を進めています。2019年8月29日（木）－31日（土）の2泊3日、横浜オンヌリ教会で行う予定です。

4. 今回のインターアクションにおける反省点と感謝

- (1) 主は生きておられ、今も働いておられることを実感しました。
- (2) 今まで日々聖書を真剣に読んでいなかったことを反省しました。忙しさに紛れて素通りの読み方で、良く内容を吟味していませんでした。それをIBS（Inductive Bible Study:誘導的聖書研究）で学びました。
- (3) つまり、主（イエス）の偉大なパワーを自分の生活の中に呼び込んでいませんでした。
- (4) もっと真に神様に仕える強いクリスチャン、積極的なクリスチャンに回心しなければと反省しました。

(5) 我々クリスチャンには偉大な創造主なる神様が日々守っていてくださる（インマヌエル）ことを改めて感謝しました。 主にありて

(次ページ写真掲載)

献金感謝（2018. 4. 1-2018. 11. 30）

皆様の献金を心から感謝します。（複数回献金者含む）

廣田具之、芝祐治、滝口巖太郎、今市宗雄、河野行秀、西澤邦輔、在原繁、桧原菜都子、瀬在道晴・米子吉田靖、竿代忠一、玉井佐源太、石井克直、中岡一秀、清水幸子、海野幹郎、石川信隆、圓林栄喜・さゆり、今村和男、中野久永、大沼薫、松山暁賢、内山義彦・和子、中村純誠・典子



開会礼拝（Lee, Pil Sup 前世界会長）



現役軍人による賛美



記念写真

2018 韓国東アジアインターアクションに参加して

コルネリオ会副会長 中野久永

イエス・キリストの御名を褒め称えます。ハレルヤ！

私は、この度韓国海軍中央教会で開催された2018年東アジアインターアクションに参加してきました。期間は、10/10（水）から3日間でした。いつも韓国のスタッフ達の献身的なサポートに感動し、感謝をしてい

ます。中央アジア国を含み10か国66名の軍人達が様々な困難を克服しやって来ました。私も米国在住で日程調整が複雑でしたが無事計画どおりに参加できました。皆様のお祈りに感謝致します。

各国報告(National Report)において、各国の軍人キリスト者会の組織、人数、活動内容や祈りの課題について、参加者に通知を受けていましたので、各国ともそれぞれ趣向を凝らした素晴らしい発表となりました。

私は日本を代表してコルネリオ会について発表する機会が与えられました。予め石川会長からパワーポイントの内容についてご指導を頂きましたので、スムーズに発表することができました。特に来年8月末に日本がホスト役を務める大会の大変重要な報告をしました。発表直後に、石川会長と私は、東アジア会長のアンドリュー・チェンはじめ関係役員の方から私達の肩に手を添えていただき、コルネリオ会のため、また来年日本での大会のために神様に力強いお祈りをして頂きました。私も、今大会テーマ「強くあれ、雄々しくあれ！」（ヨシュア記第1章6節）を心に刻み来年に挑みます。どうかコルネリオ会の皆様もこの大会のためにぜひお祈りをお願いいたします。 在主



来年の東アジア大会を日本で行うことを発表



ACCTS アジア担当のリック・メリッサご夫妻と



日本のコルネリオ会のためのお祈り